

ページネーションのための 基本マニュアル

(略称: ページネーション・マニュアル)

Ver.0006QX4.1

2000年6月30日

作成・発行: 鈴木一誌

〒162-0815

東京都新宿区筑土八幡町6-9

tel.03-3235-4785

fax.03-5261-7215

prospero@nn.ij4u.or.jp

このマニュアルは、

- Macintosh版QuarkXPress4.1を使用することを前提としている。
 - 編集者、デザイナー、組版・製版および印刷担当者がともに仕事をするためのものである。
 - 鈴木一誌・前田年昭・向井裕一著「明解日本語文字組版」(『クリエイターのための印刷ガイドブック—DTP実践編』玄光社、1999年所収)と密接な関連があるので、参照してほしい。
 - 「ページネーションのための基本マニュアル」は、下記のサイトで、公開されており、ダウンロードし、自由にカスタマイズして利用できる。書物づくり、雑誌の創刊、その他プラットフォームやアプリケーションへの応用・活用を歓迎するが、「ページネーション・マニュアル」そのものを商業化・営利化することは許可しない。
- 日本語の文字と組版を考える会: <http://www.pot.co.jp/mojji/>
JPC : <http://www.jpc.gr.jp/>
- あらゆる書籍・雑誌のページ作成に有効とは限らず、仕事に応じて不適切な箇所、不足している項目、過剰な部分を改変してよいし、するべきだろう。
 - 項目番号あるいはアルファベットのうしろの「+」はタテ組への、「-」はヨコ組への適応を示す。「+-」はタテ組・ヨコ組両方に適応するということである。
 - リスクを伴う高度なテクニックは採用していない。
 - 使用、応用、活用・改変のさいには、連絡をいただければありがたい。求めるものは、金銭的対価ではなく使用例や批評である。

1.単位

1.1+-

1pt(ポイント)を0.3528mm(1インチ=2.54cmの72等分)とする。

1.2+-

文字の大きさ、行送り、ケイの太さは、ptで指定する(級数での指定は原則として行わない)。

1.3+-

長さ、写真・図版の大きさは、mm指定にする。

1.4+-

ptとmm相互の換算については、下5けたで四捨五入する。

1.5+-

見開き起こしを、ページ編成の基本とする。

1.6+-

仕上がり寸法の外側にとる断ち分(トンボの幅)は、3mmとする。

2.データの受け渡し

2.1

a MS-DOSによる文字などの原稿は、ワープロ専用機、NEC PC-9800シリーズなども含めて、もともと汎用性のある2HDの1.44MBでフォーマットされたフロッピーで受け渡しする。やむを得ず2DDフロッピーを使うときは720KBでフォーマットする。

b ファイル名は、半角の欧字・洋数字で付す。

2.2

Macintoshでは、フロッピーを2HD/1.44MB(2DD/800KB)でフォーマットする。

2.3

MOは、3.5inchとし、230MBや540MBおよび640MBの受け渡しが可能か、さらにフォーマットのバージョンを確認する。できれば受け渡しのテストを試みる。

2.4+-

WindowsやDOSからのコンバートに問題のある記号類をリスト化する。

2.5+-

外字は、わかりしだい速やかにリスト化する。当該部分にはゲタ■をばかせておく。

2.6

a+- 編集担当者は、データとそのハードコピー、紙に書いたラフスケッチとを揃えて一袋にまとめて、デザイナーや組版担当者に入稿する。文章はおよその文字量をメモしておくとし以降のごとがより円滑になる。

b+- 文章は、テキスト形式で保存し、不要なスペースや改行は除いておく。

c+- 欧字・洋数字は、半角および1バイト入力する。

時計数字やNo.も、欧字として入力する。

カタカナの半角入力は厳禁である。

d+- 和文本文中では、かっこ類は和文として全角入力する。

(株)も、漢字を全角の丸かっこで囲む。

山かっこ〈 〉は、キーボードの不等号<>を入れてはならない。

e+- タテ組和文本文中では、/ !?は和文として全角入力するが、単位記号、たとえば%やcmは、パーセント、センチメートルと表記する。いっぽう、ヨコ組和文本文中の欧字・洋数字に所属した約物(例:!, ?, /)、単位記号(例:km, cm, kg)は、半角英数字で入力しておく。

f+- ルビは、約束されたかっこ類・約物で囲み、本文テキスト中に入れておく(例:【ルビ】 ★ルビ★ ★きよう★と★)。

g+- 欧文のイタリック、ボールド体、アクセント記号などを、いつどこでだれが入力するかを決めておく。

h 画像の保存は、各アプリケーションのオリジナルデータ形式とするが、話し合いでEPS形式に統一することもできる。

i フロッピーにはラベルを貼って記事名をはっきり書く。

j+- ノンブルを明記する。

k+- 校正記号を統一しておく。

l+- データ中のメモ書きの入れかたを、たとえば、{ } ではさむなどと決めておく。

2.7

a 写真・図版は、記事との照合箇所を明示する。

b 袋には希望締め切り日やデザイン上の要点をことばで書いておくことが大切である。

c どのようなファイル名によってデータを管理するかを決めておく。おたがいにわかりやすいファイル名にする。

2.8

デザイナーあるいは組版担当者は、組版データと、最終レイアウトのプリントアウト(モノクロ)を揃えて、入稿する。

2.9

特別の取り決めがない限り、オリジナルデータの保管は各担当者とも1か月とする。

2.10

最終出力データをだれが保管するかを決める(版元、印刷会社、作家、デザイナー、組版担当者など)。

3.本文文字組

基本設定

3.1

a+- メカニクな改行による箱組を基本とし、QuarkXPress上で、環境設定→ドキュメント→文字→標準emスペースのチェックボックスをオンにし、さらにテキストボックスの設定で、テキストとの間隔を0ptにする。

b+- 字間を、全角組(均等送りをふくむ)にするかプロポーショナル送り(かな詰めあるいは食い込み詰め)にするかをあらかじめ決め、一冊の書物の本文は統一して組む。

c+- 1ジョブは、100ページを超えないようにする。

ぶら下げとぶら下げなし

3.2

a+- 行末の句読点を、ぶら下げかぶら下げなしかのどちらにするかを決める。

1行が30字未満のとき、あるいは行中が全角組ではなくプロポーショナル送りで組まれている場合は、ぶら下げなしを検討する。

b+- ぶら下げとぶら下げなしとの観点から、行末には四つのモードが見出される。一冊の書物は、このうちいずれかのモードにより統一して組まれるべきである。行末を揃えようとする意識の強さによって下記のように並ぶ(揃えの強さ4がいちばん強い)。

c+- 揃えの強さ1=弱いぶら下げ

行末、句読点のぶら下げ、ベタ、および直後の二分アキの混在、つまりは行末句読点の位置が三種類出現することを許容する。

行末に関して、終わりかっこ直後の二分アキを許容し、半角取りでも全角取り

でも可とする。

行頭の始めかっこ直前は、二分アキ(全角取り)とする。

行中に関して、句点直後は、二分アキ、読点と終わりかっこ類直後のアキ、および始めかっこ直前のアキは、四分八分～二分浮動とする。行中の中黒直前直後のアキは八分～四分浮動とする。

d+- 揃えの強さ2=弱いぶら下げなし

行末、句読点および終わりかっこ直後の二分アキを許容し、半角取りでも全角取りでも可とする。つまりは行末句読点の位置が二種類出現することを許容する。

行頭の始めかっこ直前は、二分アキ、全角取りにする。

行中の句点直後は、二分アキ、読点と終わりかっこ類直後のアキ、および始めかっこ直前のアキは四分八分～二分浮動とする。

e+- 揃えの強さ3=強いぶら下げなし

句読点行末に関して、句読点および終わりかっこ直後の二分アキを禁止し、半角取り固定とする。行末句読点の位置は一種類しかない。

行末の中黒直後の四分アキ(全角の4分の1の大きさのアキ)を禁止する。ただし段落末尾のみ、句読点や終わりかっこ類直後の二分アキを許容する場合がある。

行頭における始めかっこ直前の二分アキを禁止し、半角取り固定、いわゆる天付きとする。

行中、句点直後の二分アキ、読点と終わりかっこ類直後のアキ、および始めかっこ直前のアキは四分八分～二分までの浮動とする。行中の中黒直前直後のアキは、八分～四分の浮動とする。

f+- 揃えの強さ4=強いぶら下げ

行末に関して、句読点は強制ぶら下げ、終わりかっこ直後の二分アキを禁止して半角取り固定とする。行末句読点の位置は一種類しかない。中黒直後の四分アキを禁止する。ただし、段落末尾のみ、句読点や終わりかっこ類直後の二分アキを許容する場合もある。

行頭、始めかっこ直前の二分アキを禁止し、半角取り固定、いわゆる天付きとする。

行中、句点直後は二分アキ、読点と終わりかっこ類直後のアキ、および始めかっこ直前のアキは四分八分～二分の浮動とする。行中の中黒直前直後のアキは八分～四分浮動とする。

g+- テキストボックスの行方向の長さは、文字のあるいは字送りの整数倍とする。

h+- ぶら下げ組のとき、文字の(均等送りのときは字送りの)1倍とする。

行揃えは、ジャスティファイとする。

本文が9ptで、-4のトラッキングをかけ、1行が43字のぶら下げ組のテキストボックスの行方向の長さをミリで算出するには、

$$(9 \times \frac{196}{200} \times 43 + 9) \times 0.3528$$

とし、下4桁を四捨五入し、下3桁までの数値にする(太字の9は文字の大きさ)。

ぶら下げなしでは、

$$(9 \times \frac{196}{200} \times (43 - 1) + 9) \times 0.3528$$

である。ともに、ベタ送りならば、 $\times \frac{196}{200}$ は不要である。

書体

3.3+-

使用書体を、和文、欧文ともに決める。

3.4+-

ひとつの書籍は、ひとつの和文本文書体から成立させる。

3.5+-

欧文書体は、ローマン体で1ファミリー、サンセリフ体で1ファミリーを使用する。

3.6+-

和文中の欧文・洋数字は、欧文書体を使う(例:明朝にBodoni、ゴシックにFrutiger)。

文字の大きさ

3.7+-

文字の大きさは、2.5、3、3.5、4、4.5、5、6、7、8、9、10、12、14、16、18、20、24、28、32、36、40、48、56、64、72、80ptを基本として使う。

3.8+-

和文中の欧文は、欧文書体によって差はあるが、和文文字の大きさの1/20 (5%)から1/12 (8%)までを目安として大きくする。

3.9+-

小さい文字の限界を、ルビを含めて2.5ptとし、大きい文字の限界は720ptとする。

字間・字送り

3.10+-

均等送りあるいはプロポーショナル送り(かな詰めあるいは食い込み詰め)にする場合、トラッキングは-4(およそ32分の31em)を目安とする。

3.11+-

欧文のワードスペーシングは、文字サイズの25~30%を基本とし、ケースに応じて+5%とする。

3.12+-

欧文のレタースペーシングはゼロとする。

3.13+-

和文と欧字・洋数字とのあいだは、本文が全角送りの場合は15%(6分)、プロポーショナル送りの場合は10%あける。

3.14+-

字アケ(字割り)は、意識的なデザイン処理以外では行わないが、調整のためには最小限の字アケを行う。

3.15+-

行頭・行末・分離禁則を守るために、また、ぶら下げ組ないしはぶら下げなし組を維持するために、追い込み優先か追い出し優先かのどちらかを調整原則として一冊の書物に適用する。+-4/200emの範囲でのトラッキング調整を行う。+-10/200emの範囲でのカーニング調整をすることもあ

文字揃え

3.16

a+ タテ組のときはセンターラインの文字揃えを原則とする。

b- ヨコ組のときはベースラインの文字揃えを原則とする。

文字の変形

3.17+-

文字は正体で使用する。

行送り

3.18+-

行送りは、環境設定—文字—行送り—モードで、タイプセッティングとし、タテ組ではセンターラインから次行のセンターラインまでの距離とし、ヨコ組ではベースラインから次行のベースラインまでの距離とする。

3.19+-

行送りは、1行の長さが30~40字の場合、使用文字の170%を基本とする。9pt/15pt、8.5pt/14.5pt、8pt/13.5pt、7.5pt/12.75pt、7pt/12pt、6.5pt/11pt、6pt/10.25pt、5.5pt/9.5ptとなる。行送りが使用文字の150%以上あれば、ルビも美しく組める。

3.20+-

行送りは、行長によって調整する。行長が短ければ行送りをせよめ、長ければひろげる。その幅は150~190%である。

3.21+-

字間を全角ベタ送りよりきつとしたときは、行送りをせまくできる。逆に、字間をひろげたときには行送りをひろげる。

行長

3.22

a+- 1行の文字数は、段数にかかわらず12~55字とする。

b+ 1段のタテ組のとき、1行の文字数は40~45字を基本とする。

c- 1段のヨコ組のとき、1行の文字数は35~40字を基本とする。

3.23+-

1行の字数が7字以下の行はつくらない。1行の字数が10字以下の行が10行以上つづくのも好ましくない。図版の食い込みなどのときに注意が必要である。

3.24+-

段落最終行に、句読点をのぞいて本文が1文字だけの行が出現することを避ける。1行に2文字以上は入れたい。

改行ルール

3.25+-

行頭禁則を守る。

、 。 , . ・ ! ? 「 」)] > 》 } 】

くり返し符号(、 > ヲ)

一(音引き)、拗・促音、・(中黒)

3.26+-

行末禁則を守る。

「 『 ([< 《 [【

3.27+-

改行における分離禁則を守る。

…… ———— などのつなぎケイ。

数字、および数字と単位記号類。

タテ組和文本文中の、小数点表記(二・三八ミリ)や「二、三の事柄」などの数字列。数字と単位記号(例:100とkm No. と4など)。

3.28

a- 欧文は、ハイフネーション改行を使用。

b- ハイフネーションは3行連続までを許容する。

c- 欧文ハイフネーションがうまくいかず、字間が空いてしまったとき、校正時に編集担当者が原稿調整する。

3.29+-

欧文固有名詞の単語ごと改行を許容するか、編集担当者と検討する(例:MS- | DOS Windows | 95)。

3.30+-

年号は、下2けたでの改行を許す(例:19 | 94年 8 | 67年)。漢数字表記のときも同様である。

改ページルール

3.31+-

見出しの泣きわかれは不可とし、本文を最低2行入れる。

最低1行でよいとしたり、見開きの偶数ページでは許容する場合もある。

3.32+-

本文末の1行の泣きわかれは不可とし、文章を最低2行入れる。

3.31の見出しの泣きわかれ禁則が最低1行でよいとするならば、本文末の1行の泣きわかれは許容され、この項目は不要となる。

インデント

3.33

a+- インデント(段落の字下げ)は、1倍下げ(和文本文の字送り)。ただし、見出し直後の字下げはないほうが誌面が美しくなる場合がある。

b+- プロポーション組のときのインデントについては、インデントなしや2倍下げなどを検討すべきである。

c+- たとえば、古典物や改行2字下がりの引用文などは、行頭から組むこともある。ただし、前行が行末まで組まれていると、段落の区別がつかないので、前行の行末に余白をとるか、1行増やすなどの調整をする。

句読点

3.34+-

、。を使用。全角ベタ送り(均等送り)の組では、句点部をスペース調整のために使わない。

かっこ類

3.35+-

かぎは、「 」『 』(小かぎ)を使用し、その使い分けを決める。

3.36+-

小かぎを、引用内引用のときに、「 「 」 」というように使うならば、その書物では大かぎ使用を検討する。

3.37+-

かっこは() [] < > 《 》 【 】 [] を使用し、使い分ける。

3.38+-

かっこ類「 」『 』() [] < > 《 》【 】 []、中黒・は、半角使用を原則とするが、文学関連の組みでは全角使用としたほうが無難である。半角使用とした場合、同方向のかっこはアキなし) だが、反対方向のかっこ類同士は半角あける) (。

ヨコ組には“ ”、タテ組にはゝ 々 を使う。

3.39+-

かっこ類は、段落最初の起こしでは全角下げ、各行頭折り返しでは頭揃えとする。編集者との協議によって半角下げも許容するが、同一文書内では統一する。

見出し直後は字下げしないことも検討すべきである。

約物・単位記号

3.40

a+ タテ組の和文本文中では、() や / ! ? は和文書体を使う。漢数字に所属する単位記号、たとえば % や cm などは、パーセント、センチメートルと表記する。欧文・洋数字に所属した約物(例: %、!、?)、単位記号(例: km、cm、kg) は、欧文書体を使う。

b+- タテ組の ! ? は、垂直のものとし、使用和文ファミリーのうちウェイトの軽いものを使い、ヨコ組では使用欧文書体ファミリーのうち、軽いウェイトのものを使う。

c+- 疑問符や感嘆符の直後は、基本的に全角アキとする。ただし、行末の全角アキはトルツメとし、当該の疑問符や感嘆符が行末位置に一致するように行中を伸ばす。

3.41

a- ヨコ組の和文中の欧文出自の約物や洋数字に所属した約物(例: !、?、/)、単位記号(例: cm、%) は、欧文書体を使う(教育的配慮からの例外はある)。

b- ヨコ組の和文中の欧文出自の約物・洋数字に所属した約物・単位記号は、欧文書体のウェイトの軽いものを使う。

ケイ

3.42+-


使うケイの種類は、0.25pt(0.9mm) 幅の表ケイを基本とする。あらかじめ出力機種がわかっているなら、ケイ幅を出力解像度の整数倍しておくほうが安全である。格別の指定がないかぎり、ケイは表ケイとする。

3.43+-

リーダーケイは、2倍の……を使う。均等アケ、均等詰め組のときも、…と…のあいだはベタにする。

傍点・傍線

3.44+-

傍点(圏点)は、とする(タテ組では、)。

3.45+-

傍線(アンダーライン)は、とする(タテ組では右側傍線)。

ルビ

3.46

a+ ルビは二分、正体、ルビ間ベタを基本とする。

b+ モノルビを基本とする。^{レジャー} ^{あさつて} 娯楽 明後日などのケースは熟語全体のグループルビ処理となるが、分離禁則となるので改行部での注意が必要である。

c+ 漢字1文字に対して3文字以上のルビがつく場合、誤読しない範囲で隣接文字にかかってよい。行頭、行末のときも、親文字は固定とする。

d+ ルビには拗・促音を使用しないのを基本とする。

3.47+-

ルビ書体は、使用和文ファミリーのうちウェイトの軽いものを使う。

3.48+-

割りルビは、原則として使わないように工夫する。

分数

3.49

a- 分数は、ヨコ組では1/8、2/3と表記し、欧文書体で組み、スラッシュも欧文書体に従属させる。

b+ 分数は、タテ組ではなるべく漢数字表記する(例:三分の二)。

文中の注記

3.50+-

文中、注記的な丸かっこおよびその中の文章は、本文の約85%の大きさの文字を使う(例:一九五〇年(昭和25年) (笑い))。

3.51

a- 注記番号などは、ヨコ組では上付き文字を二分スペースに入れる。

b+ 注記番号などは、タテ組では右付き文字を二分スペースに入れる(ベースラインシフトで位置調整をする)。

4. タイトル・見出し・リードなど

基本設定

4.1+-

文節改行組(アンジャスティファイド=行頭が行末、あるいは行頭と行末がともに不揃いになる)を基本とする。字間はプロポーションル詰めとする。

行揃え

4.2+-

タイトル、リードなど文字の要素ごとに、頭揃え(左寄せ)=行末不揃い、センター揃え=行頭と行末がともに不揃い、尻揃え(右寄せ)=行頭不揃いをはっきり使い分ける。

頭揃え、尻揃えのために、スペースを入れたり、テキストボックスを各行ごとにつくる必要があるかもしれない。

書体

4.3+-

使用書体を、本文使用書体と関連させながら、和文、欧文ともに決める。本文使用書体とあわせて、明朝体で1ファミリー、ゴシック体で1ファミリーが原則である。

4.4+-

欧文書体は、本文使用書体と関連させながら決める。本文用書体とあわせて、ローマン体で1ファミリー、サンセリフ体で1ファミリーが原則である。

4.5+-

和文中の欧文・洋数字は、欧文書体を使う(例:明朝体にはBodoni、ゴシック体にはFrutiger)。

文字の大きさ

4.6+-

文字の大きさは、2.5、3、3.5、4、4.5、5、6、7、8、9、10、12、14、16、18、20、24、28、32、36、40、48、56、64、72、80ptを基本として使う。

字間・字送り

4.7+-

欧文のワードスペーシングは、文字サイズの25~30%を基本とし、ケースに応じて+5%とする。

4.8+-

欧文のレタースペーシングは、ゼロを基本とするが、18pt以上の大きさではマイナスのトラッキングをかけ、食い込み詰めの処理も行う。

4.9+-

和文と欧字・洋数字とのあいだは、10%あける。

4.10+-

字アケ(字割り)は、意識的なデザイン処理以外では行わない。

二分以上の字アケをした場合、句読点は空きスペースに入れる。

文字揃え

4.11

a+ タテ組のときはセンターライン揃えを原則とする。

b- ヨコ組のときはベースライン揃えを原則とする。

文字の変形

4.12+-

文字は正体を使うことを原則とするが、スペース調整のため、95%前後の目立たない程度の変形をかけたり、デザイン的に思い切った長体・平体を使用することがある。

行送り

4.13+-

行送りは、環境設定—ドキュメント—段落—行送り—モードで、タイプセッティングとする。

4.14+-

行送りは、使用文字の150%を基本とする。

4.15+-

行間は、行長によって調整する。行長が短ければ行間をせばめ、長ければひろげる。その範囲は20～190%である。

4.16+-

字間・字送りをきつくしたときは、行間はせまくできる。大きな文字列ではベタ未満まで詰めることができる。

改ページルール

4.17+-

見出しの泣きわかれは不可とする。

見開きの偶数ページでも、許容しないほうがよい。

インデント

4.18+-

インデント(段落の字下げ)は、なしとする。

句読点

4.19

a+ 基本的に、。を使用。本文との統一が肝要である。

b+ 尻揃え(右寄せ)では、句読点はぶら下げとする。テキストボックスを各行ごとにつくる必要があるかもしれない。

かっこ類

4.20+-

かぎは、「」『』(小かぎ)を使用し、その使い分けを決める。

4.21+-

かっちは() [] < > 《 》【 】 [] を使用し、その使い分けを決める。ヨコ組には“ ”、タテ組には` `、を使う。

4.22+-

かっこ類「」『』() [] < > 《 》【 】 []、中黒・は、プロポーション詰めにする。ただし、かっこ類同士は四分あける。

4.23+-

かっこ類は、各行頭折り返しで頭揃えとする。

約物・単位記号

4.24

a+ タテ組の和文本文中では()や／、! ?などは和文書体を使う。漢数字に所属する単位記号、たとえば%やcmは、パーセント、センチメートルと表記する。欧文・洋数字に所属した約物(例:%、!、?)、単位記号(例:km、cm、kg)は、欧文書体を使う。

b+ タテ組の!や?は、垂直のものを使い、約物・かっこ類(!?(「・、))

は、使用和文ファミリーのうちもっともウェイトの軽いものを使う。ヨコ組では欧文書体のウェイトの軽いものを使う(例:新ゴUに新ゴL用約物を使う)。

4.25

a- ヨコ組の和文中の欧文出自の約物・洋数字に所属した約物・単位記号(例: !、/、?、cm、%)は、欧文書体を使う(教育的配慮からの例外はある)。

b- ヨコ組の和文中の欧文出自の約物・洋数字に所属した約物・単位記号は、欧文書体のウェイトの軽いものを使う。

ケイ

4.26+-

使うケイの種類は、0.25pt(0.1mm=0.28pt)幅の表ケイを基本とする。

4.27+-

リーダーケイは、2倍の……を使う。

ハイフン・ダッシュ

4.28+-

ハイフン、ダッシュの太さは、表ケイと同じとする。長さのちがいで差異を表現する。

ルビ

4.29+-

ルビは、文字の大きさにかかわらず7pt以上の大きさにはしない。モノルビを基本とする。傍点も、ルビと同じ扱いとする。

拗・促音、中黒、句読点

4.30+-

18ptより大きい文字では、拗・促音の文字の大きさを66%(三分の二)に下げ、字間はプロポーション詰める。中黒・句読点は、軽いウェイトのものを使ったり、大きさを66%にしたりして、目立ちすぎるの避ける。7ptではママでよい。したがって、18ptから7ptまでのあいだの拗・促音の大きさは下記の数値を目安にする。

16pt=70%

14pt=80%

12pt=85%

10、9、8pt=90%

音引き

4.31+-

12pt以上の大きさの文字では、音引きの長さを90～95%に短くし、字間はプロポーション詰める。

欧文・洋数字

4.32+-

12pt以上の大きさの文字中では、欧文・洋数字は文字の大きさの1/20

(5%)から1/12 (8%)までを目安として大きくする。ただし書体の組み合わせによってちがう。

見出し

4.33

a+- 見出しは、タイトルのほかに、大見出し、中見出し、小見出し、極小見出しの4ランクを最多とする。

b+- 大見出しは2段×2行どり、段中のとき前1行アケ、中見出しは2行どり、段中のとき前1行アケ、小見出しは1行どり、段中のとき前1行アケ……のように、体裁を決めておく。

c+- 極小見出しは、本文行中への埋めこみ(見出しとしての改行はなし)とし、本文と同じ大きさのゴシック体、あるいは本文と同じファミリーのウェイトの重いフォントを使う。頭に約物を入れることも可能である(例:■●○○○○)。簡条書きなどは、極小見出しの応用と考えられる。

簡条書き

4.34+-

(1)のスタイルの使用にあたっては、()の組方向が本文と揃っているかの注意が必要である。

①●のスタイルでの21以上の数字使用は、注意が必要である。ビブロス外字などをあらかじめ用意する必要がある。三桁はほぼ不可能。◎1…、●1: などデザイン上の工夫ができないか考えてみたい。

人名表記

4.35+-

人名は姓名間をあけないのを原則とするが、タイトル部などでの著者名は、1字姓、1字名あるいは、3字姓、3字名のときは例外的に二分から四分スペースをとることがある。

(例:○|○ ○|○○ ○○|○ ○|○○○ ○○○|○
○○|○○○ ○○○|○○)

註

4.36+-

本文の組み方と揃えるのを原則とする。

4.37+-

本文の行方向に揃えるのを原則とする。本文がタテ組なら註もタテ組とする。

4.38+-

本文より、2pt以上小さい文字を使用し、誌面にコントラストを演出する。本文が9ptなら註は7pt未満となる。

4.39+-

行送りは、150%を基本とする。

4.40+-

註と本文との距離は、本文書体の全角以上あける。

キャプション

4.41+-

文節改行組(アンジャスティファイド=行頭か行末、あるいは行頭と行末がともに不揃いになる)を基本とする。字間はプロポーショナル詰めとする。

4.42+-

本文の行方向に揃えるのを原則とする。本文がタテ組ならキャプションもタテ組である。

4.43+-

文字の大きさは、6pt~7ptを基本とする。

4.44+-

行送りは、150%を基本とする。

4.45+-

キャプションと本文との距離は、本文文字の全角以上あける。

柱

4.46+-

柱と本文との距離は、本文文字の全角以上あける。

4.47+-

文字の大きさは、6ptを基本とする。

ノンブル

4.48+-

ノンブルと本文との距離は、本文文字の全角以上あける。

4.49

a+- 洋数字の場合は欧文書体を使用し、6pt~7ptを基本とする。漢数字のノンブルもありうる。

b+- 目次、索引など、書物全体でノンブル書体を統一する。

5.画像・色彩

輪郭ケイ

5.1

写真・図版の角判のケイはアタリとし、例外のときだけイキと指定する。

色指定

5.2

色指定は、5%から100%までとし、できれば5%刻みとする。フィルムを介在させる工程では、5%以下の網点は変動しやすいので注意する。

5.3

最大インキ濃度を350%とする(Adobe PhotoShopのカラー設定—CMYK設定—インキの総使用量の制限—を350%とする)。

5.4

色指定は、CMYKの順とする。「カラー」の名前は、c00+m00+y00+k00の書式とし、プロセスカラー分解をチェックする。

のせとヌキ

5.5

のせかヌキかを点検する。特にペイントソフトなどで別個に制作した画

像には注意する。

5.6

トラップは、設定をゼロにする。トラップを誰がかけるのかは、ワークフロー上未解決の問題である。

特色

5.7

a QuarkXPress上のCMYK版を特色に置換するのでない限り、特色版では、プロセスカラーとのケヌキ合わせはできるが、プロセスカラーとのかけ合わせはできない。

b 画面外に許される範囲で直径10mm以上の色玉を作成しておく。色合わせのためである。CMYKインキでもなるべく大きな色玉を作成したほうがよい。

スキャンング

5.8

スキャンングは、使用サイズに対して、使用線数の二倍以上の解像度を確保(175線なら350dpi以上)するのを原則とするが、写真によっては、300~400dpiの範囲内で選択する。

QuarkXPress上での拡大縮小は、75~125%のあいだとする。

5.9

a スキャンングデータは、グレースケールないしはCMYKのAdobe PhotoShopEPSファイルで保存(プレビュー:Macintosh 8bit、エンコーディング:バイナリ、ハーフトーンスクリーン情報を含めない。ファイル名にファイル拡張子を付ける)し、QuarkXPressに貼りこむのを原則とする。

b QuarkXPress上で色・線数・コントラストなどを変えたいときは、TIFFファイルが便利である。QuarkXPress上でのEPSファイルとTIFFファイルの混在は十分に可能だが、念のため出力担当者と相談しておく。

5.10

カラー製版調子は、余裕ある解像度をもって、写真原稿や書物の性格にあわせて設定されたシャープネス、コントラスト、ボリュームのバランスによって仕上げる。

5.11

モノクロ製版調子は、余裕ある解像度をもって、写真原稿や書物の性格にあわせて設定されたシャープネス、コントラスト、ボリュームのバランスによって仕上げられなければならない。ハイライト部は0%、最暗部はソリッド(ベタ)にする。

作画画像

5.12

a Adobe Illustratorならば、IllustratorEPS形式で保存(プレビュー:Macintosh 8bit)する。モノクロ画像は黒の階調のみ、4色画像はCMYKのみで、特色は使わない。

b 1画像は1ファイルとする。

スクリーンショット

5.13

a WindowsないしはMacintoshにおいて、スクリーンショットは、ヨコ800×タテ600ピクセルの大きさを目安に、256色でTIFF保存(MacintoshではPICTでもよい)する。

b Adobe PhotoShopの、カラー設定—CMYK設定—で墨版量を決定したあと、CMYK変換し、Macintosh用のEPS保存する。

6.出力

フォント

6.1

デザイン担当者は、出力担当者に使用フォントを明示する。デザインのできあがりは、使用書体に大きく依存するのだから、印刷会社が保有していないからといって、デザイナーは使いたい書体において安易な妥協をするべきではない。出力担当者も軽々しく「アウトライン」などと口にし、最大限の努力をするべきである。

6.2

書体使用において、OCFとCIDフォントの混在は厳禁である。書物一冊のしごと全体での混在を避けるべきである。当面、OCFフォント使用を基本とし、CIDフォント使用の際には、出力担当者にその旨、はっきりと伝えることとする。

出力

6.3

出力線数は、カラーもモノクロも、一冊の書物本文では統一するべきで、175線を基本とする。階調を要求される写真やイラストが入るカバーは、言うまでもなく175線以上である。エンボスがかかった紙や表面が粗い紙への印刷は、133~150線でもよい場合がある。

6.4

フィルム出力の解像度は、出力線数のおよそ15倍を確保する。175線なら少なくとも2400dpiは必要であり、より画像の階調が重要なときは、3600~4000dpi(20~23倍)で出力する。

色校正

6.5

ポストスクリプト対応のカラープリンタで色校をし、必要に応じて印刷機による本紙の色校正をとる。カラープリンタの色校では、特色の扱いの不自由さや、発色の傾向を関係者が理解しておく。

6.6

色校正と本機のキャリブレーションを揃えておきたい。

印刷

6.7

本刷りでは、インキを盛る。印刷担当者は、インキの盛ることができる版を製版担当者に要求するべきである。